スペイン美術教育の考察とより良い図工・美術教育の在り方を探る

前在スペイン日本国大使館付属マドリッド日本人学校　教諭
兵庫県丹波市立青垣小学校　教諭　村　山　次　郎

キーワード：在外教育施設、マドリード、図工・美術教育

１．はじめに

スペインには、数多くの歴史的遺産がある。同時に、数多くの芸術家たちの作品が残されている。スペイン人の図工・美術教育の実際を研究することを通して、日本の図工・美術科教育のより良い指導の在り方に迫っていきたい。

２．スペインの図工・美術教育の現状と課題

(1) 平成28年度の交流から

平成29年２月13日（月）現地の学校との交流活動を行った。現地の学校は、コンセルタードと呼ばれる半公立・半私立の学校で、日本人学校の近くにあるマリア校である。日本人学校では、３つのグループに分かれて交流した。その内１つは、「折り紙」を紹介するグループであった。紹介した折り紙は、「折り鶴」、「手裏剣」、「着物」の３つである。実際にマリア校の児童や教職員が製作し、聞き取りを行ったところ、次のような回答を得た。

【児童の感想より】

・とても難しかった。（手裏剣、折り鶴）
・できた時はとても嬉しい。
・紙工作はあまりしない。
・色紙を切って、モザイク調にデザインする活動はある。

【教職員の感想、回答より】

・すごくレベルの高い製作である。図工の授業で、紙工作の立体はほとんど取り扱うことがない。
・マリア校の児童は、指先が慣れておらず、難しい。
・一般にスペインの学校では、スケッチや色塗りが多い。

現地校との交流の様子

折り紙の製作だけで、日本の児童が取り組む製作の技術の高さに驚いたようだった。私自身も活動の中に入り、マリア校の児童に折り方を教えたが、紙の端を揃えて折ることが難しい児童が多くいたのが印象的だった。また、日本の児童と同じく、完成した作品を持ちながら浮かべる笑顔は、喜びが溢れていた。

(2) 現地校の教科書から

現地校に数ヶ月登校した児童の図工科の教科書について考察する。現地校の教科書は、30の項目に分かれている。特に多く取り扱われているのは、色塗りと教材を模写するスケッチである。これらのことから、スペインの初等美術教育では表現力の育成というより、

①見た物の形をとらえること
②その通りに描くこと
③彩色

の３点の技能面を重視していることが分かる。

模写し、色を塗る教材

(3) 聞き取り調査から

現地校に通う児童の聞き取り調査を行った。児童は、聞き取り調査の時点で、本校では小学校 6 年生に短期入学生として在籍する児童である。現地校では中学校 1 年生の学年に在籍しており、小学校段階、中学校での図工・美術教育に関する知識や体験を持つ。聞き取りで分かった現地校の図工・美術に関する教育は、次のようなものであった。

【小学校】

・図工の授業は週に 2 時間程度の設定。

・図工室があり、教科担任制である。

・小学校低学年段階では、市販のテキストを購入し、テキストに沿った授業が行われる。

・小学校高学年段階では、スケッチブックを購入し、教師が指示したものを描く授業が行われる。

・小学校を通して、遠足に行けば風景画を描く、美術館で有名な絵画の模写をする、公園や学校近隣の森でスケッチを行う等、校外での写生活動を盛んに取り入れている。

・小学校段階の図工では、木材や金属、電気関係は扱わない。

【中学校】

・プリント（白紙）が配布され、枠から教師の指示により作成する。枠作成も評価の対象となる。

・教師の指示は、板書され、課題の標記についてもプリントに視写する。

・算数の図形を描く授業が多い。例えば、1 辺が 4cmの正三角形を描いたり、平行線を描いたりする等。

・現地校の算数・数学の授業は日本の算数・数学のように作業がほとんど無く、その代わりに図工・美術の時間に作図活動を行うようである。

・色相環やスケッチ等の学習も行われる。

・木材、金属、電気を使用し、作品を創る Technology の授業がある。

【評価について】

・テキスト、プリントには教師によるチェックが入り、合格ライン以下の場合、助言がある。再度プリントを提出すると「努力点」とともに評価の点数が付与され、教科の評価に反映される。

【児童の感想から】

聞き取りをした児童の感想は、「日本の図工授業の方が楽しい」だった。理由は、木材や金属、粘度等、手を使った活動が多く、バラエティに富んでいるからと言っていた。日本の図工・美術教育の方が、より手を使った造形活動を重視していることが分かる。また、算数・数学的分野においても、手を使って体験的に学び取る活動を重視していることが明らかになった。これらのことから、スペインの美術を形成してきた歴史的な背景による写実主義は、現代の学校教育にも受け継がれていると考えられる。

(4) 現地校訪問から

EL　TEJAR　の校舎外観

2019 年 10 月 29 日に、マドリッド日本人学校教員の研修の一環として現地校訪問を行った。公立幼稚園と小学校併設の EL TEJAR という学校で、児童数は 450 人、教員数は 20 名が在籍する。児童が学習する教科は、国語（スペイン語）、算数、理科、社会、音楽、図工、体育（基本週 3 回、夏はプールを 2 時間行う）、英語（1 年生～）図書で、週 1 回読み聞かせや著者訪問などもある。情報リテラシー（4 年生以上）、宗教か生活を選択する。最近は、生活を選択する児童が増えているそうだ。現地校の教員に、美術館鑑賞に行くかどうか、またその回数や目的を質問したところ、次のような回答が得られた。

・年に 1 回は必ず行く。他に劇、音楽、博物館等の鑑賞などがある。（学期に 2・3 回）

・学習した内容に関係している場所へ行く。

・画家について事前学習を行い、美術館鑑賞をする。また、事後学習として友だちの顔を描くなどの活動も取り入れている。

・低学年での目的は、教師と子どもの楽しみの共有と、親が連れて行けない家庭のために。

これらの回答から、日本の学校に比べ、頻繁に美術館鑑賞を行っていること、また、事前・事後に渡り学習を積み上げていること、画家を取り上げた授業を行っていることという大きな違いが明らかになった。

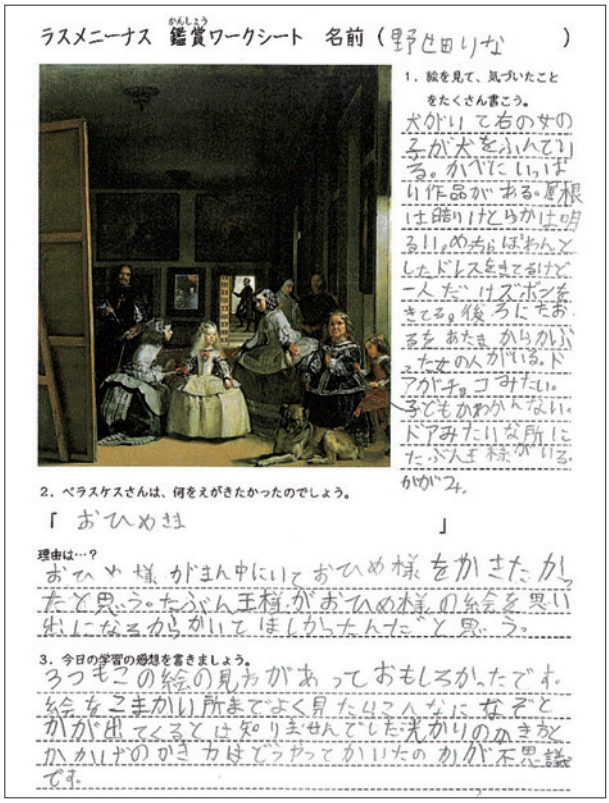
3．スペインの図工・美術教育の良さを取り入れた授業実践

(1) 実践の趣旨

スペインの図工・美術教育は、模写やスケッチ、図形領域に偏っている傾向があることが分かった。手をしっかり動かしながら、表現活動を行う日本の図工・美術教育の方が、児童生徒の関心や意欲をより高めることができるだろう。しかし、美術館に鑑賞に行き、事前・事後の学習を含め美術への関心を高める取り組みは、現地校の方が日本の学校と比べ、より積極的に行っている。そこで、スペインの図工・美術教育の良さを取り入れた授業を、現在勤務するマドリッド日本人学校で実践することにした。

授業では、スペインを代表する画家「ディエゴ・ベラスケス」の作品「ラス・メニーナス」を取り上げた。世界的に有名な作品であることに加え、プラド美術館へ社会見学に行き、本物を見ている児童の経験を踏まえた実践を行いたいと考えたからである。目標を「スペインの代表的な画家ベラスケスの作品を知り、親しむ。絵画鑑賞の仕方には、たくさんの方法があることに気づく」こととし、4年生児童対象に授業として行った。

(2) 授業後の児童の感想


ラスメニーナス 鑑賞ワークシート 名前（野田りな）

1．絵を見て、気づいたことをたくさん書こう。

犬がいて右の女の子が犬をふんでいる。かべにいっぱい作品がある。屋根は暗いけどゆかは明るい。めちゃぱちんとしたドレスをきてるけど一人だけズボンをきてる。後ろにたおるをあたまからかぶったなのがいる。ドアがチ。コすみたい。子どもかわかんない。ドアみたいな所にたぶんぎ様がいる。かべが2。

2．ベラスケスさんは、何をえがきたかったのでしょう。

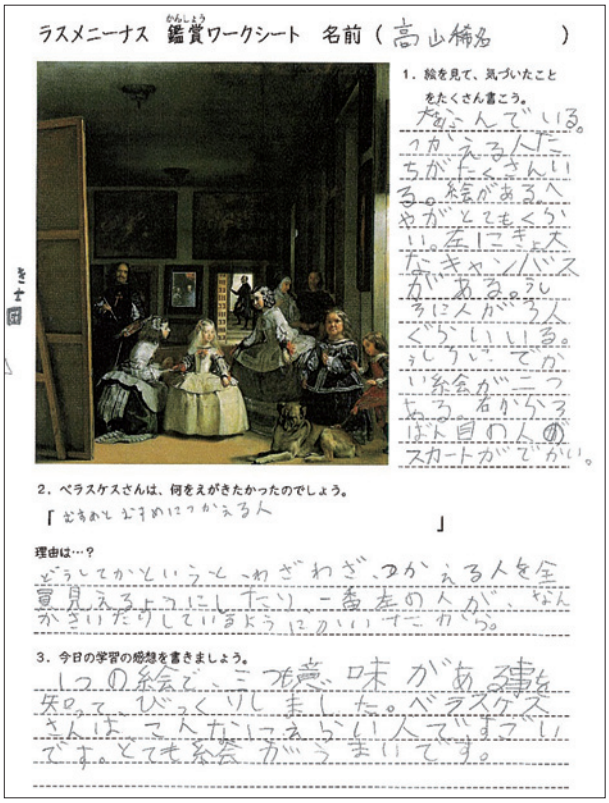
「おひめさま」

理由は…？

おひめ様がまん中にいておひめ様をかきたかったと思う。たぶん王様がおひめ様の絵を見いだしになるからかいてほしかったんだと思う。

3．今日の学習の感想を書きましょう。

3つもこの絵の見方があっておもしろかったです。絵をこまかい所までよく見たりこんなになぞとかが出てくるとは知りませんでした。えかりのかき方とかかげのかき方はどっちがかいたのかが不思議です。


ラスメニーナス 鑑賞ワークシート 名前（高山楠名）

1．絵を見て、気づいたことをたくさん書こう。

犬がふんでいる。つかえる人たちがたくさんいる。絵がある。へやがとてもくらい。左にでっ大なキャンバスがある。うしろに人が3人ぐらいいる。うしろにでかい絵が二つある。右から3ばん目の人のスカートがでかい。

2．ベラスケスさんは、何をえがきたかったのでしょう。

「おうおとおうひにつかえる人」

理由は…？

どうしてかというと、わざわざつかえる人を全員見えるようにしていて一番左の人が、なんかさいたりしているようにかいてあるから。

3．今日の学習の感想を書きましょう。

1つの絵で、こんな意味があるのを知って、びっくりしました。ベラスケスさんは、こんなにえらい人ですごいです。とても絵がうまいです。

(3) 成果と課題

見学から期間が空いての事後学習となったが、「3つもこの絵の見方があっておもしろかったです」「ベラスケスさんは、こんなにえらい人ですごいです。とても絵がうまいです」と、感想を書いた児童の様子から本実践が関心・意欲を引き出す鑑賞指導に有効だったと考える。

本時は、実験的に試みた授業であったため、後半部分は教師主導の展開になってしまった。子どもたちの発見、気づきから知識を得ていくような展開、また、1時間の授業で学ばせたいことを絞った授業を展開していくことが今後の課題である。

4．終わりに

自身の教職経験で感じた図工科教育の課題とスペインの図工・美術教育の現状及び課題の考察とを関連させながら、より良い図工・美術教育の実践を探った。鑑賞指導の実践は、日本の学校ではまだまだ少ない。しかし、本レポートの実践のように、画家やその作品を取り上げた鑑賞指導も児童生徒の美術への関心・意欲を引き出す手立てとして有効であると考える。日本には、日本独自の文化である浮世絵や墨絵等、優れた絵画がたくさん存在する。海外の作品だけでなく、日本ならではの作品の鑑賞指導についても実践していきたいと考えている。

最後に、現地校の先生方を始め、本レポートのためのインタビューに快く回答してくれた児童生徒の皆さん、授業を受け、素直に感想を綴ってくれた子どもたちに、心からお礼を申し上げます。

―参考文献―

・小学校学習指導要領
・中学校学習指導要領
・「教育」安藤万奈、坂東省次、戸門一衛、碇順治編
・「現代スペイン情報ハンドブック」改訂版、三修社、2007、P.178
・ゴヤ:スペインの栄光と悲劇（「知の再発見」双書）ジャニーヌ バティクル（著）、 高野 優（翻訳）
・プラドで見た夢―スペイン美術への誘い（中公文庫）文庫 神吉 敬三（著）
・プラド美術館ガイドブック　執筆者多数・翻訳者多数　国立プラド美術館